審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲　第 1352 号	氏名	森山　弘朗
審査担当者	主　査	川口　巧	(印)
	副主査	梅野博仁	(印)
	副主査	久下　亨	(印)

主論文題目：Mid-term Functional and Structural Outcomes of Large/Massive Cuff Tears Treated by Arthroscopic Partial Repair
（鏡視下部分修復術の治療成績：臨床成績及び構造的評価）

審査結果の要旨（意見）

本論文は、一次修復不能な大広範囲腱板断裂に対する鏡視下部分修復術が肩関節の機能及び構造におよぼす影響を検討したものである。鏡視下部分修復術を施行した大広範囲腱板断裂患者のうち一次修復不能であった24名を対象とし、術前と術後のJOAスコアおよびUCLAスコアを経時的に評価している。解析の結果、JOAスコアは67.9点から85.4点へ、UCLAスコアは16点から29点へと術後に有意な改善を認めている。また、構造的評価では腱板のフットプリントへの付着面積は術前と比較して、術後3か月および最終観察時で有意に改善していた。最終観察時には再断裂を認めたが、付着面積は治療前よりは保たれていた。本論文は、一次修復不能な大広範囲腱板断裂に対する鏡視下部分腱板修復術の機能的及び構造的有効性を初めて明らかにしたものである。本論文は難治な一次修復不能大広範囲腱板断裂に対する治療効果向上に貢献しうるものであり、学位に値するものである。

論文要旨

大、広範囲腱板断裂症例に対する鏡視下部分腱板修復術では、機能的及び構造的評価を経時的に報告されたものはない。今回臨床成績及び構造的評価を経時的に行った。2009年から2016年に試行した鏡視下部分修復術30例のうち、術後2年以上経過を追え、術前、術後3か月、最終観察時にMRI撮影をした24例（follow-up rate 80%）が対象である。平均経過観察期間は61.8か月。臨床成績はJOAスコア（日本整形外科学会肩関節疾患治療成績判定基準）と、UCLAスコア（the University of California, Los Angeles score）を用いた。術前、術後3か月、最終観察時のMRI画像で構造的評価をし、術前、最終観察時の単純X線写真を用いて関節症性変化の出現の有無を評価した。JOAスコアは平均67.9点から85.4点へ、UCLAスコアは16点から29点へと、術前から最終観察時にかけて有意な改善を認めた。構造的評価では腱板のフットプリントへの付着面積は術前より、術後3か月、最終観察時で有意に改善していたが、3か月から最終観察時にかけてフットプリント接着面積に有意なpropagationを認めた。また、6例に関節症性変化が出現し、その6例では、出現していない18例に比べ、最終観察時の臨床成績は有意に低かった。